

小学校英語の教科化に向けて、 教科間の連携や授業時数確保に挑戦

徳島県 阿波市立伊沢小学校

阿波市立伊沢小学校では、文部科学省の研究指定を受け、同じ中学校区の2つの小学校とともに小中高連携の英語教育について研究を進めている。他教科や行事と連携した、単元ごとのカリキュラムづくりを進める一方、5・6年生では教科「外国語」を先行実施し、年間70時間の授業時数を確保するため、週3回、各15分間のモジュール学習を行っている。その成果と課題を見ていきたい。



◎ 1947（昭和22）年開校。徳島県の中央部、豊かな自然に恵まれた環境にある小学校。地域と協働して食育に力を入れている。

校長 細井 誠先生

児童数 186人

学級数 12学級（うち特別支援学級5）

電話 0883-35-2034

URL <http://e-school.e-tokushima.or.jp/awa/es/isawa/html/>



校長

細井 誠

ほそい・まこと

モットーは、「子ども、教師、保護者、地域が一体となった『楽しい学校』づくりを進めていきたい」



教諭

美馬宏紀

みま・ひろのり

外国語教育推進コーディネーター。モットーは、「子どもたちに、未来へ羽ばたくための豊かなコミュニケーション能力を育みたい」

取り組みの概要

研究指定を受け、5・6年生で教科「外国語」を先行実施

阿波市では、2006年度から日本人英語講師（以下、JTE）を市内全小学校に派遣し、担任とJTEとのチーム・ティーチングによる外国語活動を、全学年で週1コマ実施してきた。

そうした実績を踏まえて、阿波市立伊沢小学校は、同阿波中学校、同じ中学校区の久勝小学校^{ひさかつ}と林小学校、近隣の徳島県立阿波西高校とともに、2014年度、文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」（4年間）の指定を受け、小中高連携の英語教育について研究を進めている。研究テーマは、「語学力・対話力を備えた豊かなコミュニケーション能力を育む英語教育」だ。細井誠校長は、小学校での目標についてこう語る。

「小学校3校では、次期学習指導要領から高学年で始まる英語の教科化を先行実施しています。文部科学省から、教科化をしてもその目的は英

語のマスターではなく、英語好きを増やすことだと言われたのを受けて、本研究でもそれを主目的に掲げ、さらに、コミュニケーションで大切な相手意識を持たせることを重視した授業づくりを進めています」

同校の英語の授業時数は、1～4年生は週1コマ（1年生は年間30時間、2～4年生は年間35時間）で、2015年度から教科「外国語」を先行実施している5・6年生では、週2コマ（年間70時間）としている。

6年間のカリキュラムは小学校3校で共通化した。1～4年生は自作教材、5・6年生は自作教材と『Hi, friends!』『Hi, friends! Plus』を活用した内容で、単元ごとに単元目標・評価規準・単元計画を記した年間指導計画を作成し、毎年見直している。2015年度には小中高12年間のCAN-DORリストを作成し、2016年度の年間指導計画はそれを基に、題材の系統性をより強化して作成した。各校では、この年間指導計画を基に、担任とJTEが学級の実態や児童の特性

を生かした各回の授業をつくる。

1単元（ユニット）は4～5コマ分で構成され、新しい言葉や表現に出合う「導入」、その言葉や表現に慣れ親しむ「練習」、それをを用いて自分の思いや考えを伝え合う「活用」という流れで学びを深める。教科「外国語」では、この流れに、表現内容や表現方法を工夫してスピーチやビデオレター作成などを行う活動を「定着」として加えている（図1）。

カリキュラムの工夫

他教科や行事と連携して伝えたい思いをふくらます

カリキュラムの特徴の一つは、他教科や学校行事との連携を強く意識した題材であることだ。外国語教育推進コーディネーターを務める美馬宏紀先生は、次のように語る。

「相手意識を大切にしたいコミュニケーションとすることを、『誰に、何を、どのように』をしっかり意識させています。この中で『何を』は、子どもの中に伝えたいという意欲がないと、表面的な活動になってしまいます。そこで、他教科や行事の内容を外国語活動に関連づけて、伝える必然性のある場面設定を心がけています」

例えば、6年生の「将来の夢を伝え合う」では、「総合的な学習の時間」で自分の将来を考える活動を行った後、外国語の授業でその内容を英語で伝え合う活動を行った。また、6年生の図工では、2年生に読み聞かせをするために英語の絵本を作った。これらの授業案は、主に学級担任が考え、実践している。

「活動が定着することで、先生方が自信をもって積極的に英語にかかわるようになったと感じます。実際、各学年で様々な指導事例が出てくるようになりました。例えば、話し方・聞き方に関する指導として、特別支援学級でも工夫して、アイコンタクト・スマイル・クリアボイスなど、一人ひとりに合った活動を行うようになりました。この活動は他校にも広がっています」(美馬先生)

また、行事と関連させると効果が高まることから、学習発表会でのスローガンの発表や運動会での借り物競争などでも英語を活用している。

授業時間確保と評価の工夫

授業と連携したモジュール学習で学習効果を高める

同校では、5・6年生の週2コマのうち1コマ分を15分×週3回(火・水・金)のモジュール学習とし、朝の会の前に設定している。担任が学習計画の作成と指導を行い、正確な発音が必要な場合などはJTEと連携する。2015年度は手探り状態で進

図1 ユニットのプラン (単元計画)

English Unit Plan 6年		2016年4月
単元名	外国人に話しかけよう	時数 5時間
単元目標	○観光地における外国人との会話を想定して、マナーに気を付けて積極的コミュニケーションを図ることができる。(コ) ○相手の出身地や有名な物、好きな物をたずねたり聞いたりする表現を使って、簡単な会話を行うことができる。(表) ○会話をつなげる相槌の取り方を大切にして、簡単な会話を聞きとることができる。(理) ○修学旅行先(京都、奈良、大阪)と故郷(徳島)にある有名な場所と有名な食べ物について、英語での言い方を理解する。(知)	
単元計画		
時	目標と主な学習活動	言語材料
1	●単元の目標を確認し、修学旅行先(京都、奈良、大阪)と故郷(徳島)にある有名な場所と有名な食べ物について英語での言い方を理解する。 ・Hello song ・修学旅行先と徳島の有名な食べ物や建物について想起する。 ・key word activity ・Missing card activity	金閣寺 銀閣寺 清水寺、琵琶湖、映西村、大阪城、明石海峡大橋、八橋 たこやき等 Indigo, whirlpool, sweet potato, sudachi, Awa dance, Vine bridge Hello song の CD 徳島有名な物写真カード 修学旅行先の写真カード
2	●相手の出身地を尋ねる言い方や、徳島名物を紹介するいい方を知り練習する。 ・Hello song ・チャットタイム	A: Where are you from? B: I'm from ○○. A: We are from Tokushima. Tokushima is famous for

*伊沢小学校提供資料をそのまま掲載

図2 モジュール学習の内容 (5・6年生)

活動の種類	時間数	具体的な活動例
コミュニケーションに関連する活動	20時間 (15分×60回分)	45分の授業に関連し、話す・聞くことの定着を目指す活動 ・ゲームやチャンツ、ペアワークによる英語表現の練習 ・コミュニケーション活動に用いる制作物の作成
学校行事に関連する活動	6時間 (15分×18回分)	・運動会の演目に取り入れたALTとの会話の練習 ・[5年生] 宿泊学習で行う名刺交換の練習 ・[6年生] 修学旅行先で外国人に行うインタビューの練習
文字への慣れ親しみをめざす活動	6時間 (15分×18回分)	・[5年生] ヘボン式ローマ字、アルファベット大文字・小文字 ・[6年生] 音の読み方、文の書き方、語順への気づき
外国語チャレンジクイズ	3時間 (15分×9回分)	主にリスニング形式のテストを行い、「外国語理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」に関して評価

*伊沢小学校提供資料を基に編集部で作成

めたが、今年度はそれを①話す・聞くの定着、②学校行事関連、③文字への慣れ親しみ、④外国語チャレンジクイズの4つに整理して(図2)、大まかな年間計画を立てた。

「教科化では、学習内容の『定着』『活用・思考』『文字学習』がポイントになると捉え、本校では45分授業とモジュール学習を効果的に組み合わせています。元々、外国語活動では1つの活動を15分単位で進めていたもので、モジュール学習を組みやすいという背景もありました」(美馬先生)

モジュール学習のメリットとしては、45分授業と合わせると週4日英語の授業があり、ほぼ毎日英語に触

れられるため、定着しやすいことが挙げられる。実際、2015年度末に行った児童向けアンケートでは、「英語の表現や言い方が身についたと思いますか」「モジュールでの英語学習は楽しかったですか」など、役立ちや楽しさの肯定率は軒並み90%を超えた。

他方で、デメリットとしては、担任の負担が大きいこと、それまで朝学習の時間に行っていた補充学習の時間が減ることなどが挙げられる。補充学習については、5・6時間目の間に10分間の「ショートスタディタイム」を設けて移動させるなどの工夫をした。

「モジュール学習は、2006年度に

週1コマの外国語活動を導入した際、本校の4年生でその時間を確保するために、国語の1コマ分を朝学習の時間に行うことにしたのを参考に導入しました。どの学校でも外国語活動の時間確保が課題で、ほかの2校は45分授業を週2コマ行っています。最終的に、3校で成果と課題を共有して、どちらがよいか検討したいと思います」(細井校長)

5・6年生では教科化に合わせて評価も行う。児童の行動観察、毎時間の振り返りシート、単元の終わりに行う「外国語チャレンジクイズ」(単元で学習した表現のテスト)、学期末のパフォーマンステストの結果を総合して、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」「言語や文化に

についての知識・理解」の4観点をA～Cの3段階で評価している。なお、文字の読み書きについては、児童の意欲の向上につながる評価のあり方について検討を進めている。

成果と展望

楽しく英語を学ぶ子どもが増え、会話力もアップ

英語学習の成果について見ていこう。まず、研究指定を受けている小学校3校の5・6年生では、「英語の授業が好き」「英語の学習に進んで取り組んでいる」の肯定率が、全国平均より10ポイント以上高い。また、外部検定試験では、会話力が5年生から6年生にかけて飛躍的に伸びるなど、英語への興味づけや英語力に関して成果が見られる。さらに、同校の児

童へのアンケートでは、「活動中に自分や友だちのよさに気づくことがある」の肯定率がどの学年も80%を超え、望ましい話し方・聞き方が身につけている様子がうかがえる。

「外国語活動には、笑顔で相手の目を見てはっきりと話すというコミュニケーションの基本を学べるよさがあり、活動を通じて、相手を大切にしたいコミュニケーション力が身につけてきていると感じます。外国語活動は、習得したことがコミュニケーションに生きてこそその成果だと言えます。授業づくりは大変ですが、先生方もやりがいをもって楽しく取り組んでくれています。今後も、子どもたちが英語を楽しみ感じられるような授業づくりにまい進していきたいと思います」(細井校長)

特集まとめ

次期学習指導要領へ向けて、各学校で「カリキュラム・マネジメント」の仕組みの確立を！

これまで「カリキュラム・マネジメント」とは何か、どう進めていけばよいのかについて、有識者のお話やいくつかの事例を紹介してきた。それぞれについて取り上げた背景や、取材を通して感じたことをまとめると、以下のようになる。

● 課題整理 高木横浜国立大学名誉教授のお話

中央教育審議会の教育課程企画特別部会の委員でもある高木名誉教授には、次期学習指導要領における「カリキュラム・マネジメント」のねらいをうかがった。お話の中では、資質・能力をバランスよく育むためには「カリキュラム・マネジメント」が必要であること、カリキュラム編成においては、3つの側面を意識しつつ、各教科で単元ごとに学習指導案を組み立てることがポイントであることが分かった。

● 実践事例1 上越市立大手町小学校

高木名誉教授が語る「カリキュラム・マネジメント」をまさに今、実践しているのが大手町小学校だと言える。教科横断的な視点でのカリキュラム編成、組織的・定期的な見直しによるPDCAサイクルの確立など、参考になる部分は多い。他方で、今回紹介した実践が次期学習指導要領下でどこまで可能になるのか、今後の文部科学省の動きを注視したい。

● 実践事例2 飯山市教育委員会、同市立城南中学校

今回の「カリキュラム・マネジメント」とは少し視点が異

なるが、教育委員会による学校への働きかけの一例として紹介した。学力向上へ向けて、全教員参加の仕組みや、年間を通じてPDCAサイクルを回すフローを確立したことなど、今後、自治体全体でカリキュラム・マネジメントを進めていくにあたり、参考にしたい事例である。

● 実践事例3 阿波市立伊沢小学校

小学校英語の教科化を進めるにあたり、その授業時数確保が中央教育審議会でも大きな懸案事項として挙げられている。そこで、英語の教科化を先行実施している伊沢小学校に、授業時数確保の一環として導入された「モジュール学習」について、現状と成果、課題をうかがった。英語に触れる頻度が高まり、定着が進むなどの成果が見られる一方で、教員の負担増や他教科へのしわ寄せなどの課題も見られた。授業時数確保については、今後の研究と議論の進展が待たれる。

次期学習指導要領において、最初にカリキュラム・マネジメントが求められるのは、2018年度から先行実施される小学校英語の教科化であろう。それに向けては、2017年度が勝負の年になると思われる。教育委員会においては、次期学習指導要領の動向に関してアンテナを高く張るとともに、カリキュラム・マネジメントを回すための仕組みづくりや、教員の意識改革などをぜひ計画・推進していただきたい。